都市の緑 3表彰

緑がつなぐ 町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:斎藤夕子　photo:坂本政十賜

［第43回］

緑の都市賞
内閣総理大臣賞:緑の事業活動部門

一般社団法人シモキタ園藝部

緑に囲まれた「下北線路街」

2013年、小田急線の東北沢駅〜下北沢駅〜世田谷代田駅間の地下化工事が完了して以降、順次進められてきた線路跡地の整備は、2022年5月に全面開業した。「下北線路街」と名付けられたかつての線路上約1.7kmは歩行者専用道となり、沿道には、中庭を囲む小さな商店街「BONUS TRACK」(2020年開業)や「温泉旅館 由縁別邸 代田」(2020年開業)、路地裏を回遊するような空間が構成された2階建ての商業施設「reload」(2021年開業)など、個性的な店舗や施設が連なり、従来、下北沢がもつサブカルチャーが息づくまちといった雰囲気を生かしながらも、爽やかな心地よさが感じられる空間が誕生した。

下北線路街の心地よさを醸成している大きな要因が、沿道に続く緑の豊かさだろう。2022年1月に完成した下北沢駅南西口の「NANSEI PLUS」エリアにある約700㎡の緑地「シモキタのはら広場(以下、のはら)」はその象徴だ。遊歩道を挟んでこの対面に設けられた建物「こや」は、下北線路街の内7割ほどの植栽管理を担う「一般社団法人シモキタ園藝部(以下、園藝部)」の活動拠点でもある。

「2020年4月に20名ほどでスタートした園藝部の部員は、今や200名を超えました」

そう教えてくれるのは、園藝部の共同代表理事の一人、関橋知己(せきはしともみ)さんだ。駅南西口から伸びる遊歩道が開通して以降、何もなかった人工地盤上の土地に緑地が完成したのが2022年4月。以来、メディアでの紹介や、現地で活動する部員の姿を見た人々の入会が相次ぎ、部員数は急増。現在は7割が近隣住民というが誰でも参加でき※1、年齢層は70歳代から小さな子どもたちまで、まちまちだそうだ。「とくに〈子ども部員〉は、エリア内にどんな生き物が生息しているかを調べてくれる主力メンバーです」と関橋さんは言う。

「循環」をテーマに持続可能な地域社会を目指す

園藝部にはもともと二つのルーツがある。2011年頃から地域で開催されてきた、線路跡地の活用方法に関する説明会や話し合いの場を通じて市民グループ「シモキタ緑部会」が結成され、緑化を提案していた。そ

下北沢駅南西口、「NANSEI PLUS」エリアに広がる「シモキタのはら広場」

左●豊かな緑に包まれる「下北線路街」。園藝部では約1.7kmに及ぶ沿道を6区画に分け、各区画のリーダー・サブリーダーを中心に植栽管理を行っている
上●店舗兼住居の個店が連なる小さな商店街「BONUS TRACK」。関橋さんは同エリアの植栽管理のリーダーでもある

遊歩道を挟んでのはらの対面に建つ「こや」。園藝部の活動拠点であり、カフェやワークショップスペースとしても利用されている

こやの3階テラスからのはら方面を眺める

左●こやに併設された飲食事業の拠点「ちゃや」。のはら圃場に育つハーブを利用したワイルドティーなどを提供している
上●のはら圃場の一角に設けられたコンポストエリア。下北線路祭の日には「コンポストショールーム」として、訪れる人にさまざまなコンポストを紹介していた
右●コンポストショールームで紹介されていた大小の「ミミズコンポスト」

の声を受けた小田急電鉄の要請で下北線路街の緑化マスタープランを作成したランドスケープデザインオフィス・株式会社フォルクが、市民がかかわる植栽管理の仕組みを提案。この両者が合流して「下北線路街園藝部」が発足する。これが現在の園藝部の前身だ。「まちの緑を自分たちの手で」をキャッチフレーズに、まちの緑を地域の共有資源として、守り、育んでいくための活動を展開している。

それにしても、のはらは一見、未整備の草むらのように見える。鮮やかな花々が植えられた花壇や、キレイに敷かれた園路があるわけでもない、いわゆる普通の原っぱだ。駅前の好立地にありながら、この「何もない感じ」の空間が成立していることには驚く。だが、そうした佇まいこそが園藝部のスタンスを表明している。

下北線路祭では南西口の広場にマルシェを出店。「シモキタハニー」も販売されていた

のはらの緑は特定の誰かのものではなく、さらには、人だけではなく、虫にとっても、鳥にとっても開かれた「まちのコモンズ（共有地）」として位置付けられているからだ。

「もともとは何もない土地でしたから、最初はランドスケープデザイン会社のフォルクが園藝部メンバーの意見を取り入れながら、土壌改良も含めて植栽計画をつくり、自然の原っぱのように感じられるように設計しています。ただ、その後勝手に生えてきた雑草も、生き物にとって必要であれば除草していません。もちろん放置しておけばいいわけではなくて、ここは、まちなかだけど里山のような場所だと考えています。人がかかわることで緑も生き物も豊かになっていく。そんな空間として手入れしています」

関橋さんがそう語る、園藝部の活動コンセプトは「循環」だ。園藝部では、下北線路街の植栽管理を小田急電鉄からの委託事業として請け負っている他、コンポスト事業、飲食事業、養蜂事業などの自主事業を展開しているが、これらの事業も「循環」に照らし合わせて実施しているという。植栽管理による剪定・除草作業で出た草木はコンポストにして土に還し、実生の苗を育てる土壌としても活用する。こやに併設されたカフェ「ちゃや」は飲食事業の拠点で、のはら圃場で育つハーブでつくったワイルドティーなどを提供している。近隣のビル屋上では養蜂を行い、ここで採れた天然非加熱の蜂蜜「シモキタハニー」※2をちゃややECサイトで販売している。

「他にも、緑の担い手を育てるためのスクール〈シモキタ園藝學校〉の開催や、ご家庭で育てられなくなった植物を引き取り、アップサイクルする〈古樹屋（ふるぎや）〉など、さまざまな事業を行っています。部員が〈やってみたい〉と思う取り組みが、私たちが考える〈循環〉というコンセプトに則っていれば、事業化しているという感じです」と関橋さん。

また、コンポストには、近隣のカフェやレストランで出たコーヒー滓や蕎麦殻、果物の皮も使っているが、園藝部ではこうした地域との連携にも積極的に取り組んでいる。自然の循環に加え、地域の環境改善への貢献を通じて地域社会の中に循環のあるライフスタイルを実現していくことも、園藝部の大きな目標だからだ。そして、園藝部発足から4年、のはらが完成してからは2年ほどの活動のなかで、そんな循環の輪が確実に広がっていることは、部員の増加が証しているだろう。関橋さんは「部員にとって、園藝部がサードプレイス的な役割も果たしている」とも認識しているが、ここでは、緑を通じた新たなコミュニティが育まれ、まさに「緑のまちづくり」が実践されている。

変化しながら続いていく緑の空間

2024年6月1、2日の2日間、「下北線路祭 2024」が開催された。2022年のまち開き以降、毎年開催されている下北沢の新しいフェスとして、第3回目となる今回は「歩いて楽しむカルチャーフェス」をテーマに下北線路街沿道の店舗・施設を中心に、マルシェや音楽ライブ、ワークショップなど、多数のイベントが行われた。園藝部でも「まちのみどりにふれる2 日間 線路祭で園藝部 DAY！」と銘打ち、いくつかのイベントを実施。のはらの一角で開催されていた「コンポストショールーム」もその一つで、部員が手がける「ミミズコンポスト」（土壌のミミズが生ごみを食べて微生物の分解を早める）や、家庭にも取り入れやすい小型コンポストのつくり方・使い方などを紹介していた。ある意味、地味なイベントながら盛況で、説明する部員の話に熱心に耳を傾ける人の姿は途切れない。どうやら、のはらが醸し出す自由で伸びやかな空気感が、下北線路祭に訪れた人々を惹きつけるようだ。お祭りの賑わいを楽しみながらも、自然に包まれた空間に、ホッとするような安らぎが感じられ、ここでひとときを過ごしたくなるのだろう。

一般社団法人シモキタ園藝部共同代表理事の関橋知己さん

6月1、2日に開催された「下北線路祭」の賑わい

のはらの中に、ソバの白い花が咲いていた。関橋さんによると、土壌をマルチングした際に入っていた蕎麦殻から、勝手に生えてきたものだそうだ。「でもソバの花は、蜜源としてとってもいいんです。だからそのままにしています」とのこと。そして「ミツバチも、とても働き者の園藝部の部員です」と、何のてらいもなく語る。当然、コンポストのなかのミミズも、緑を育むのに欠かせない、有能な部員である。

季節によって、さまざまな草木が生え、枯れていく循環をそのままに受け入れるのはらに、完成形はない。鳥が運んできた種が芽吹き、それがハチミツの材料になるかもしれないし、思いがけない景観をつくるかもしれない。ただここが、緑を通じたコミュニティの拠点である以上、常に誰かが気にかけ、手入れをし、折々に姿を変えながらも、まちなかの里山的コモンズとして、永く続いていくはずだ。地域の人々が「自分たちの手で」育む緑の環境こそ、近い将来「下北沢らしさ」の象徴になるのではないだろうか。

※1：シモキタ園藝部への入会には、入会費＋年会費一般3000円、大学生500円（高校生以下は無料）、別途ボランティア保険350円／年への加入が必要（2024年7月現在）
※2：ハニージェイプロジェクト株式会社との共同事業